

---

# 俺と棋士姫とバレンタイン

黒鉄大和

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と棋士姫とバレンタイン

### 【Zコード】

Z9315Q

### 【作者名】

黒鉄大和

### 【あらすじ】

文化祭の日、幽霊部員だった俺が何気なしに籍を置いていた囲碁部へと顔を出してもみると、彼女はちんまりと座つて俺を待っていた。彼女との出会いが、俺を見知らぬ囲碁の世界へと導いていく。二人だけの囲碁部。俺は彼女との時間を過ごしていった。そして、それから四ヶ月の月日が流れたある日の事。俺は彼女にバレンタインデートに誘われる……。黒鉄大和が贈る2011年バレンタイン作品。テーマは純愛と囲碁? 完全新作短編(ネット的には中編?)、スタートです!

## 凡な俺と可愛い棋聖（前書き）

初めましてからこんばんわまで。どうも、黒鉄大和です。

今回はバレンタイン企画第2弾という事で、《純愛》と《囮碁》をテーマにラブコメを描いてみました。

今回は僕の十八番である戦記でもバトルでも、黒鉄大和の代名詞とも言うべきハーレム作品でもありません。第1弾《俺と妹と偽装デート大作戦》と似た感じの作風になっています。

完成度としてはまあまあという感じ。前回の俺と妹は企画から起承転結をしつかり決めてから書いたのに対し、今回は突然書きたくなつてやりたいように書いただけなので。

ただし、だからと言って手を抜いた訳ではないのでご安心を。

それでは2011年バレンタイン企画作品、どうぞ！

## 凡な俺と可愛い棋聖

県庁所在地から延びる鉄道の沿線沿いにある郊外に立地している私立桜上高校。郊外だからこそ土地代が安いのか、二つ校舎が横長く延びているが特徴だ。

生徒がいるのは三年前に完成したばかりの四階建ての新校舎。三年生は二階、二年生は三階、一年生は四階という学年が上がる」とに教室の立地条件が良くなるという仕組みだ。

三階の奥の方にある一年四組は朝のホームルームまであと五分という事もあって多くの生徒が集まっており賑やかだ。五分前だがまだ数人が姿を見せていないのは問題かもしれないが。

そんな教室の窓側の一一番後ろから二番目という絶好のポジションを獲得しているのが俺、山城秋斗。やましろ あきと自分で言うのも何だが、至つて普通な男子生徒だ。成績は平均より少し高いくらいで特に委員会にも属していない、部活だって平凡な囲碁部に属しているだけで、友達も多くもなく少なくもない。つまり特筆して何か目立っている生徒ではない訳だ。

「山城、お前も来るだろ？」

ぼーっと空を見ていた俺はその声にハツとなつて意識を戻す。すると目の前にはメガネを掛けたいかにも真面目な男子生徒が俺を見ている。そいつは俺の反応を見て呆れたような表情に変わる。

「お前、俺の話聞いてたか？」

「あ、悪い。ちょっと聞いてなかつた」

ごめんごめんと軽く謝ると、そいつは「つたく」といいつつも特に怒る様子はない。こいつの名前は田崎俊介。たさきしゅんすけまあ腐れ縁みたいな友人だ。ちなみにこのクラスのクラス長を務めている、見た目通り真面目な奴だ。成績もいいし外見もそれなりにいいので女子に人気がある、性格が悪ければクラス中の男子の嫉妬の炎で上手に焼けてしまつくらいの存在だ。

「だから、明日みんなでカラオケでも行つて騒げりつぜつて話しゃ。今年のバレンタインは土曜日の休日だからな」

「ああ、そうだったそうだつた」

「クラスの半数くらいが参加するんだが、お前も参加するだろ？」

「明日は世に言うバレンタインというものだ。日本では女子が好きな男子にチョコを渡す聖なる日」と言つが、最近は義理チョコだつたり友チョコだつたり、逆チョコなどが流行つていて本来の目的を多少を見失つてゐる傾向があるが。これならアメリカのように男女関係なく渡せばいいのに、と考える俺は間違いだろうか？

田崎はこのバレンタインに合わせてクラスの男女を集めてこのようないベントを開く。まあ、簡単に言えばみんなで上げれば恥ずかしくないという考え方と義理でもいいのでチョコが欲しい男子の必死さが見え隠れするイベントつて訳だ。ちなみに田崎の友好関係は広い為、他のクラスからも何人も來るので結構盛大なイベントになる。「去年はお前の手伝いもあつて大成功だつたからな。また手伝つてもらえると嬉しいんだが。どうせ來るんだろ？」

確定事項を事後承認を得るかのような物言いに、俺は若干呆れつて言葉を返す。

「お前、俺に予定があるつていつ前提条件を忘れてないか？」

「どうせお前暇だろ？」

これが長年連れ添つてきた友人の自分に対する人物評価だと思つと悲しくて涙が出てくる。どうやら田崎は俺の事をバレンタインに予定がない寂しい奴だと思つてゐるらしい。實に腹立たしい事だ。「で、どうするんだ？」

来るだろ、と言いたげな口調で問う田崎。だが、事は君が思つてゐるほどうまく運ぶものではない。それを今教えてやる。『

「残念だが、先約があるので俺はバスだ」

俺は自慢げにそう言つてやつた。すると、田崎は心底驚いたような表情を浮かべる。なぜだろ？、勝つたはずなのに胸に残るのは苦々しい敗北感しかないと。

「お前がバレンタインに予定あるなんて、今話題の2012年に世界は滅びるってのも満更ウソじゃないな」

「表出る田崎。今日こそテメエのその無駄にクオリティーが高い顔面を平凡クラスにしてやらあ」

俺はキレながらスッと机の中に忍ばせてある鉄製の物差しを握る。縦に降りおろせば凶器に、横にして机の上で弾けば楽器に早変わりする万能アイテムだ。

「冗談だつて、冗談」

俺の殺氣を感じ取ったのか、半歩引きながら謝る田崎。俺は実に優しい人間だから謝られたらそれを無視してキレる事ができないのだまあ、後でこいつから借りているゲームのデータを消去しておこう。

「ちょっと待てッ！ 今お前世紀末的に恐ろしい復讐の計画を立てただろッ！？」

「そ、そんな訳ないだろ」

「な、何て奴だ。俺の心の中の復讐劇を先読みしただとッ！？ そこまで好きなのかよあのギャルゲーッ！」

ちなみに、外見はいいので女子にモテるにはモテる田崎だが、残念な事にギャルゲーやエロゲーをこよなく愛するガチオタだとう事は付き合いの長い俺しか知らない禁忌だ。

友人の一生を左右する爆弾を持っている身としては、これは恫喝要素に入れてはいけない。ふざけ程度で使うにはあまりにも威力が強すぎる。軍隊が強すぎる兵器は使い勝手が悪いというのもうなずける気がする。

……というか、こんな奴にチョコを必死に上げよつとしている女子が毎年何人かいるのだが、その子達にはご愁傷さまとしか言いうがない。

「それで、バレンタインに何の予定があるんだよ？ もしかして新作のギャルゲーの行列にでも並ぶのか？」

「お前じゅあるまいし。本当に先約がいるんだよ。悪いな」

そう、「冗談やウソではなく俺には先約がいる。かわいい後輩の頼みとあれば、万年暇人の優しい人である自分としては見過ごせない。

「ふうん、残念だな。せっかくイベントとか色々考えてたのにさ」

「悪いな」

みんなを盛り上げようと体育祭や文化祭で奮闘していた姿からも見てわかるとおり、こいつはみんなで協力して何かをやるという事が大好きな奴だ。趣味は思いつきソロプレイゲームなのだが。

田崎は「仕方ないな」と言って他のクラスメイトの所へ行く。バレンタインイベントともなると事前準備が忙しいのだろう。

そう、バレンタインなのだ明日は。

「……チョコ、もらえねえな」

いつもなら田崎のイベントに参加して義理100パーセントでも何個かチョコを貰えるのだが、今回はイベント不参加なので0となるだろう。

俺は何だか心細い気もしながら、小春日和な空を静かに見つめた。

その日の放課後、俺はいつものように第一校舎、生徒からは旧校舎と呼ばれているこの学校が創設された時からある校舎へと向かう。現在ここはあまり使わない教室や部活やクラブ、同好会などが部室として使っているある意味部室棟となっている場所だ。

旧校舎と言つても木造のボロボロという訳ではなく、ちゃんと鉄筋コンクリートでできたしっかりとしたものだ。二十年ばかり使用しているので確かに汚れてはいるが、まだまだ現役としてやつてくれる。

俺はその三階の一一番奥、第二校舎こと通称新校舎と呼ばれている場所から一番遠い部室へとやつて来た。部室の扉の上には小さく『囲碁部』と書かれている。

俺は慣れた手つきでドアを開けた。

部室の中はいたつてシンプルだ。元教室だけあって広さは十分。むしろ机や椅子が必要最低限なもの以外は全て排除されているので

広すぎるくらいだ。

教室後ろにある棚には生徒が私物を置く為のものだつたのだろうが、今は部室の備品が置いてある。備品というか、部長の私物だな。部長の趣味においてある30cm水槽には部長が好きな熱帯魚が泳いでいる。確か「リドラスハステータス」だつたか？ 灰色の小さなわいらしい魚が10匹ばかり自由気ままに泳いでいる。

棚の上には観葉植物がいくつか置いてあり、全体的に寂しい部屋を彩つている。

そして、部室の中央にはなぜかこたつが置いてあり そこに彼女はちんまりと座つていた。

「……あ、こんにちは山城先輩」

「」寧にぺこりと頭を垂れたのは小柄な少女。立つと平均的な身長の俺の肩くらいまでの高さしかない。ボブカットに切り揃えた髪型に細い銀色のフレームをしたメガネが特徴の彼女の名は霧島小真希。この地味めな目立たない子が一年生にしてこの部活の部長を務めている。

一年生である自分ではなく、一年生の彼女が部長を務めているのには少々込み入った事情があるのだが、今は省こう。

「お茶、用意しますね」

「サンキュー」

小真希は俺が部室に入るところの上に置いてある急須を手に取り、電気ポッドから慣れた手つきでお湯を入れる。その間に俺は部室の隅に掛けられた突っ張り棒にハンガーを掛けただけの簡易クローゼット（？）に上着を掛け、ネクタイを緩めてリラックスした格好となつて小真希の前に座つて足をこたつに入れる。暑すぎず、ちょうどいい温度だ。

「お茶どうぞです」

そう言つて小真希はお茶の入つた田舎のじいちゃんが使いそうな渋い湯呑みを俺の前に差し出して来る。ちなみにこれが俺専用の湯呑みだが、デザインのチョイスは俺ではなく小真希のものだ。

小真希の前にも色違いの少し小振りな、いわゆる夫婦湯呑みという感じで置かれている。囲碁部に属するだけあって、どうにもおばあちゃんっぽい子なのだ。

「サンキュー」

こいつに出会うまでもお茶なんてほとんど飲んだ事もなかったのに、慣れとは恐ろしいものだ。今では全く違和感がなくなっている。

湯気を立ち上らせる湯呑みの向こうにはお饅頭が入ったカゴが置かれている。まさにお茶に合う和菓子という感じだ。俺はそんなお饅頭を一つ手に取つて口に放り込む。小真希曰く老舗の和菓子店のお饅頭なので絶品だそうだが、事実この饅頭は無茶苦茶うまい。正直これだけ食べに部室に来ていると言つても過言ではないかも知れない。まあ、そんな事小真希に言えばふてくされて饅頭を没収されかねないので口が裂けても言えないが。

饅頭一つを食べ終えた所で、俺は改めて部室を見回す。過度と言つぱりでもないが、部室の各所には小真希の私物が置かれている。細々した物ならば別に構わないのだが、今自分が入っているこたつや水槽などは許容範囲を越えているのではないだろうか？

「まあ、温かいし癒されるのは事実だから別にいいけどな」

「え？ 何がですか？」

「何でもねえよ。ただ、平和だなあつて思つてや」

「は、はあ……」

俺の言葉の真意がわからないのだろう小真希は曖昧にうなずく。そんなかわいらしい後輩の姿に微笑みつつ、俺は学校で自宅以上にくつろげる一時を楽しむ。しかし、ここは一応部活だ。お茶を飲んで饅頭食つてくつろぐのもいいが、活動をしなければならない。

囲碁部がなすべき活動は、当然囲碁だ。

「小真希、いつもの勝負を頼む」

俺の言葉を待つてましたとばかりに、小真希は嬉しそうにうなずき、横に置いていた碁盤を机の上に置く。それは十三路盤と呼ばれるタイプの碁盤で、初心者からプロまで扱う盤。一般的に囲碁と言

われて思い描くのは十九路盤であり、十三路盤はそれよりも一周りくらい小さい。

囲碁とは簡単に言えばこの盤上により多くの自分の陣地を獲得した方が勝ちという、陣取り合戦のようなゲームだ。

「それじゃ、いつものように私が白で先輩が黒。 5子目でコミなしのハンデで」

「おうよ」

囲碁に詳しい人なら十三路盤で5子目、しかもコミなしというのがどれだけ激しいハンデかわかるだろう。

碁盤には中央に天元と呼ばれる中央点があり、端から上下それぞれ第3線が交差する場所、四隅それぞれ四力所に星と呼ばれる点がある。5子目はその全ての星と天元にあらかじめ黒石が事前に置かれている事を意味する。つまり、最初から四隅と中央という要所に黒の先兵隊がいるという訳だ。囲碁で隅は重要な得点陣地であり、中央もまたそうだ。その全てが最初から自分の勢力下にあるというのは、かなりの有利。しかも十九路盤ではなくより範囲の狭い十三路盤ならばなおのこと。

「コミとはその制度上、先手となる黒の方が有利となる為にあらかじめ黒がハンデを負うルールの事。一般的には6目半で、もしも黒が5目勝つっていてもコミが入ると白が1目半で勝利となる。

十三路盤で黒に置き石のハンデを与えつつ、さらに自身が有利になるコミを捨てた状況。黒が俺なので、白の小真希はかなり不利な状況に見える。

だが、実際はこれくらいのハンデがないと俺は小真希とともにに戦う事ができない。何しろ俺は囲碁を本格的に始めてまだ三ヶ月も経っていない素人。一方の小真希は個人で様々な大会に出て実力を見せてているプロ。本当のプロではないのであくまでアマチュアだが、その実力はプロに匹敵するとも言われている。囲碁検定三段の段位は伊達ではない。

こんな大人しそうで弱々しい感じの少女が、ひとたび囲碁という

戦場に赴けばまるで戦を知り尽くした武将のような烈火の快進撃を見てくれるのは、今でも信じがたい。

「それじゃ、お願ひします」

「お願ひします」

囲碁を始める時の礼儀。互いに頭を下げてから対局が開始される。バレンタインモードで街がきれいにライトアップやイルミネーションをされる中、桜上高校の一室では碁盤に石が置かれるパチッとという音だけが静かに響く。

## 文化祭と遅れた出会い

俺が小真希と出会ったのは四ヶ月前の事。桜上高校の文化祭が執り行なわれた、ようやく夏の暑さが取れて幾分か過ごしやすくなつた日の事。

俺のクラスの出し物はメジャーなお化け屋敷。良くも悪くもない無難な出来だつた。隣のクラスが女装喫茶だつたのである意味力オスではあつたが。

俺はその施設隊だったので前日までは忙しくダンボールを切つたり色を塗つたりとしていたが、お化け役は兼ねていなかつたので文化祭自体は特に予定もなかつた。

午前中は友人と校内を巡つて様々な出し物を見て楽しんだ。軽音楽部や吹奏楽部の演奏は祭りのメインイベントに等しい。演劇部の劇はまあまあという所か。こう言つては何だが所詮が学生レベルだからドラマのよつにはいかない。緊張の為か棒読みになつてしまつた女子を見て、何となく微笑んでしまつた。

運動部は校庭でイベントを行つていた。サッカー部は学生や子供、時には大人相手に簡易的なフットサルを行つたり、野球部は投擲のみやバットを使った的当てなどで盛り上がつている。テニス部もまたしかりだ。

一方の文化部は主に作品の展示がメインとなる。天文部は星座などの写真を展示し、美術部も部員の作品を展示している。こう言つては何だが、文化部の出し物というのはあまり盛り上がりがない事が多い。数少ない盛り上がつている場所と言えば料理体験ができる家庭科部やカルメ焼きで子供達の心をガツツリ掴んだ化学部くらいだろひ。

一年生の駄菓子屋で特に意味もなく祭りのノリで買つてしまつた綿菓子片手に、俺は部活やクラスの出番がある友人達と別れて一人になつた。

「さて、どうしたものか」

俺は何をするでもなく廊下の壁に背を預けてぼーっと天井を見上げてみる。

この学校の生徒の多くは部活に属している。これは学校の方針で部活に属す事を前提に、属さない者は放課後の補修やボランティアに強制参加が義務付けられているからだ。一部、生徒会や各委員会に属する場合は免除だが、単純な帰宅部は強制参加となる。勉強が好きという奇麗な学生以外は皆仮にでも部活に属したがる。それが例え幽霊部員だとしてもだ。

かく言う俺もその幽霊部員の一人だ。籍は一応あまり規則に厳しくなさそうな囲碁部に置いたが、実際に活動している場所に行つた事はない。噂では囲碁部全員が実質帰宅部だというのだから何の負い目も感じない。

ずいぶん昔に囲碁をテーマにしたアニメが放送された時は全国的に囲碁部の部員は増えたが、現在ではまた元の状態に戻っている。この高校の場合はさらに悪く、廃部寸前の所を仮初の部員で残つているに過ぎないらしい。

正直、囲碁なんてやつた事はない。国営放送にチャンネルを回した時に時たま見かける事はあるが、すぐに変えてしまうので囲碁なんて板の上で白黒の石を置きあつ古めかしいゲーム、としか印象を持つていないので。

なぜか、俺は囲碁部の事を考えていた。周りたい場所は全部回ったし、自分がなすべき仕事がなく暇を持て余す身としては、唯一自分が行く理由のある囲碁部の事が気になつたようだ。いつもなら思考の隅にも置かないのに、これも祭りの影響つて奴か。

「行ってみるか……」

俺はポケットに突っ込んでいたいにも学生が作ったっぽい簡素なパンフレットを取り出し、囲碁部が活動している場所を調べて歩き出した。

祭りの喧騒は主に運動部やクラスの出し物が中心となつてゐる為か、文化部が集中する第一校舎はそんな第二校舎に比べて静かだつた。何というか、ちょっと涙が出てきた。

しかも囲碁部はそんな静かな校舎の一一番端っこに位置してゐるらしい。喧騒の『け』の時もなくなつた場所に、その部室はあつた。他の部のようすに部室の前に設置されている各部の掲示板に紙で切り抜いた囲碁部とだけ書いてある簡素なもの。下には『お茶もお出しします』という寂しい宣伝文句が書いてある紙が貼つてあるが、こんな辺境の地にまで来てお茶を飲むのような人間はまずいだろう。

何となく、もう帰つてしまおうかとも思つたが、ここまで来たのだからと自分に言い聞かせて俺はドアを開いた。

中もまた涙ぐましい。弱小部なりにがんばったのか、折り紙の輪飾りが部室全体をグルッと囲んではいるが、飾り付けらしいものはそれくらいだ。

部屋は元教室だけあって広く、今は一つ一セツトの机が六個ばかりに置かれ、各所にはテレビで観たあの囲碁盤が置かれている。横には白黒の石が置かれたケースが置かれている。

部屋をグルッと見回すと観葉植物が何個かあり、なぜか教室背後の棚には水槽が置かれて魚が泳いでいる。

そして、一番驚くのはそんな部屋の隅に置かれた、これまたなぜかこたつ。そこに一人の少女がちんまりと座つていた。

まさに文化部少女と言つにふさわしいメガネを掛けた少女は一人で本を片手に囲碁をやつていた。他に人の姿はなく、今ここにいるのは俺と彼女だけ。

本格的に帰ろうと思つて踵を返そうとした時、どうやら向こうがこつちに気づいたらしく、俺を見て驚いたように目を丸くすると、自分の状況を見て顔を赤らめて慌てて立ち上がりこちらへと小走りにやって来る。

「あ、あの、いらっしゃいませ……ッ。い、囲碁部へようじょッ

！？」

見事に最後噛みやがつた。さつきの演劇部の女子以上に緊張してゐるぞこりや。まあ、恥ずかしくて顔を赤らめている所なんかはかわいいが。というか、マジでかわいいんじゃねえかこいつ？

容姿は小柄の為少し幼げに見えるが、肌は白く目はクリツとして、唇は薄桃色で柔らかそう。雑誌なんかで見るモデルともテレビなどで見るアイドルともまた違つかわいらしさ。正直、今まで会つて来た女子の中で一番なんじゃないかこいつは。

そんな下心丸出しな思考を巡らせていると、向こうつも黙つてゐる俺に困つてゐるのか一人で狼狽している。

「あ、すまん。えつと、ここは一応団碁部でいいのかな？」

「は、はい」

「君一人だけ？」

「……は、はい。一応部が存続できるだけの人数は登録されているんですけど、私以外皆さん籍だけ置いている方々らしいので。私一人でやらせていただいきます」

健気にはにかむ少女の言葉に、俺は全力で土下座して生まれて来た事を来世まで謝り続けたい衝動に駆られた。すまん、俺はその籍だけ置いている幽霊部員のクソ野郎の一人です。

何となく気まずくなり、何を話せばいいのか困惑していると、少女は「あの、もし良ければ席に座つてください」と緊張気味に言う。ここで断ればこの場から逃げられたが、これはあくまで俺の想像かもしれないが、どうやら俺がこの団碁部来客第一号だつたらしく少女は何としても座つてもらいたいという気迫というか気持ちが隠し切れずに入放出してしまつてゐる。どうやらすでにこの扉を開いた時点で退路は断たれていたらしい。

部屋から出て行く事もできず、目の前には必死に部屋へ引き入れようとしている少女が一人。俺は「さ、サンキュー」と言つて部屋へと一步を踏み入れた。

「あ、こ、こちらにどうぞ……」

少女は一番手前の席に俺を案内する。俺が案内された席に座ると少女はこたつの方へ向かい、そこに置いてある電気ポットから慣れた手つきで紙コップにお茶を注ぐ。どうやら紙コップのビニールを破っている所を見ると、本当に俺が来客第一号だつたらし！」

「ど、どうぞ」

緊張しながら少女は俺の前にお茶を置き、「失礼します」と前置きしてから俺の対面へと座つた。当然俺と彼女は向き合つ形になる。より気まずい状況になつて困る俺に対し、少女は意を決したように伏せていた顔を上げる。

「あ、あの。幾つか質問よろしいですか？」

「い、いいぞ」

「その、この学校の生徒さんでいいんですね？」

「あ、ああ。一年生だ」

桜上高校の制服は特筆して他の学校のデザインと差異はない。特に今は夏服をまだ使つてるので、男子の夏服なんてズボンとワイシャツだけなので、一見しただけでは他校の生徒と見分けがつかない。特に文化祭ともなれば他校の生徒も来るので尚更だ。

「じゃあ、やつぱり上級生なんですね」

「という事は、君は一年生？」

「はい。申し遅れました、私一年の霧島小真希です。一応この団碁部の部長を務めさせてもらつてます」

そう言つて少女 小真希は自己紹介をする。部長を務めさせてもらつているという部分では若干恥ずかしそうに頬を赤らめた。

「一年生で部長つて異例じゃないのか？」

通常部活というのは年功序列。上級生、主に一年生もしくは三年生が務めるものだ。この時期は三年生が抜ける部活もあるので一、三年生の部長が入り乱れる季節。この文化祭を三年部長最後のお役目、もしくは新部長の実力披露とするのかは各部それぞれだ。

だが、そんな中で一年生の部長というの異色であり異例だ。だが、俺は何となく予想ができ、そして罪悪感で顔がひきつる。そん

な俺の表情の変化に気づいていないのだろう、小真希は複雑な表情を浮かべながらうなずく。

「そ、そうですね。でも私以外の部員が同級生上級生問わず実質幽霊部員ですから、部の運営上活動している人に任せなければならぬので、私が拝命させていただきました」

大変な仕事ですが一生懸命頑張りますという真っ直ぐな気持ちが伝わってくるくらい、小真希は緊張しながら微笑んだ。その笑顔に、俺の罪悪感はさらに重くなる。もはや朝食にトンカツを食べるくらいの重さだ。

俺が強烈な居心地の悪さ（完全に自業自得だが）を味わっているなど露知らず、小真希は次の話題へとステップを進める。

「それで、そのお……、先輩はなぜ今回団碁部へ来ていただいたのでしょうか？」

ついに来たか、俺が最も答えづらい魔球が豪速球で一直線にジャストミートだ。

「その、自分で言うのもなんですが、ここは祭りの中心から最も離れた場所です。そこをわざわざ訪れていただいた理由をお伺いしたいのですが」

当然の質問であり、彼女からしてみれば何の問題もないだろう。だが、ものすごく個人的だが俺にとつては見事な四面楚歌的な攻撃力抜群の問い掛けだ。

俺は一瞬、適当な理由でも並べてみようかと思った。「祭りの喧騒からちょっと離れたくて」とか「団碁部ってあまり活動を聞いた事がないから気になつて」、最悪「団碁に興味があつて」でも通るだろう。

だが、本当にそれでいいのだろうか？

ここで逃げ道を作つて、それを使って逃げてもいいのだろうか。一人で寂しく部活を、それも対戦相手がいなくては成立しない卓上ゲームの部に、彼女一人を残してもいいのだろうか。俺が逃げれば、またこいつは一人で参考書片手に一人碁を打つ。対戦相手になんか

なれなくとも、話し相手くらいにはなれるのではないか。

考えてみれば、一年生の頃から一度も来た事がなかつたが、ここは俺の部活だ。そして、こいつは身勝手ではあるが俺の後輩。後輩の面倒を見るのは先輩の役目だ。

いや、言い訳なんてどれだけ並べたって意味がない。俺は純粋に、後輩こいづを一人にさせたくないのだ。

こんな平凡な男子高校生一人に、必死になつてここにいてほしいと願う彼女の瞳を見てしまつたから。これ以上、彼女に悲しい思いはさせたくない。我ながら、実に身勝手で臭いセリフだと思う。実際、俺が後輩の立場だつたら罵声の一つだつて浴びせたいくらいだ。

今更勝手だとか、卑怯者と罵倒されてもいい。ただ、せめてこれからは細田に部活に出るべきだ。何しろ俺は暇を持て余している男子高校生なのだから。

知らなかつたのなら何をしてもいい訳ではないが、知らなかつたなら仕方がない事もある。だが、一度知つてしまえばもう逃げる事はできないし、したくもない。

どうやら俺は、自分でも知らなかつたが妙に変な正義感というか責任感があるらしい。内心苦笑しながら、俺はまだ熱々のお茶を冷ましつつ一口含み、コップを置く。

「強いて言えば、自分の所属する部活がどんな状態なのか気になつてさ」「

言つてしまつた。これで俺はもう自ら最後の退路を断つてしまつた。どうやら俺の言葉はこいつの予想とは違つたのだろう、表情が明らかに驚き一色に染まつてゐる。

「え、あの、囲碁部の方ですか？」  
「籍を借りてただけの幽霊部員だけどな、悪かつた

「え？ あ、いえ、あの……」

いきなり会つた事もない幽霊部員が現れて、しかも一方的に謝られる。こいつじゃなくても俺だつて困惑するような妙な状況だ。

「ほら、この学校つて部活に属してないと勉強会に強制参加でしょ？だから、それを避けたくてさ。その、ほんとごめん」「い、いえ。畠さんやっている事ですから、そんなに気に病まないでください」

「自己紹介遅れたね。俺は一年の山城秋斗、よろしくな」

「あ、これはどうも『丁寧』」

俺が名乗ると、礼儀正しく小真希は頭を垂れた。顔を上げた途端、俺と視線がぶつかる。その瞬間、小真希は小さく微笑んだ。ある意味裏切り者に等しい俺に向かって、だ。俺はそんな小真希の笑顔に応えるようにして口元を緩ませる。

「これからは、ちゃんと部活にも参加するよ」

「あ、お気持ちは嬉しいですが無理しなくてもいいですよ」

「無理なんてしてないさ。元々暇人だから時間には苦労しない

それに、女の子一人をこんな無駄に広い部室に置いておきながら、それを無視できるほど俺は人間ができちゃいないからな」

言つてみて我ながら臭いセリフだなあと思つた。それを隠すように照れ笑いを浮かべると、小真希も照れたように頬を赤らめながらはにかんでいた。

「じゃ、じゃあお言葉に甘えさせてもらいますね。私、意気地がないから友達もいなくて、ずっと一人でした。だから、誰かと一緒にいられるのって、すごく憧れてたんです」

そう言つて健気に微笑む小真希の姿に、俺はまたしても全力土下座したい気持ちになつてしまつ。もう少し早く気づいていれば、そんな過ぎ去つてしまつた時間を悔やむ。だが、そんなもの悔やんでもどうしようもないのもまた事実だ。

「それじゃ、早速ですが。囲碁部は囲碁部らしく、囲碁をしましょう。先輩、囲碁のルールはご存知ですか？」

とりあえず、俺が囲碁をできるかどうかを確認する小真希。だが残念ながら俺は今日まで囲碁というものは一切触れ合わずに生きてきた為、当然ルールなど何も知らない訳だ。

「「めん、全然知らないや」

正直に言つと、小真希は驚かなかつた。予想通りと言つた所だとうか。まあ、囮碁を知つていたら囮碁部で幽霊部員なんかやつていなかだらうという簡単な推理ではあるが。

「そうですか。では、私がみつちり指導させていただきますので、覚悟しておいてくださいね」

「お手柔らかにお願いします」

嬉しそうに初めて満面の笑みを浮かべながら言つ小真希に、俺もまた自然と微笑んでいた。

祭りの喧騒から掛け離れた囮碁部の部室で、俺は小真希と出会つた。

## 夕焼けと聖夜の約束

あれから俺は週三回の活動日必ず部室に顔を出すようになった。

囲碁の打ち方自体はすぐに理解できたが、それをゲームとして自在にプレイできるようになるにはまだまだ時間がかかりそうだ。

俺は囲碁の打ち方を小真希に教えながら、彼女との会話を楽しんだ。最初に抱いた印象の通り彼女はあまり自分から話掛けるような子ではないので、基本的には俺が話題を振つて小真希がそれに答えるという形式だ。おかげで、俺は小真希の事を色々と知る事ができた。彼女も俺の事を知る事ができたと願いたい。

文化祭から始まり、体育祭、ハロウィンパーティー、クリスマス会とうちの学校は他校に比べてイベントが多い。小真希とはそれらを一緒に過ごしたりしながら、少しづつお互いの距離を縮めていった。

そして、今に至る。

「負けたあ……」

俺はため息混じりに言い、目の前に広がっている囲碁盤を見詰める。囲碁は白と黒の境目、国境みたいなものがしつかり制定されてお互いの陣地にもはや侵攻できない状況になつて互いにパスした段階で終了となる。その後それぞれの陣地を数えやすいように整理し、互いに取つた石を相手の陣地に戻して埋める。最終的にそれぞれの陣地で囲んだエリアの空白地帯、何も石が置かれていない場所の広さで勝敗が決まる。

今俺の目の前に広がっているのは、一見すると互角のよう見えるが、実際はわずか2目差で俺が負けた。善戦しているように見えるが、こつちはかなりのハンデをもつて負けているという事をお忘れなく。

「やっぱり先輩は詰めが甘いです。星の下は意外と広いので、早々

に石を置いておかないと入り込まれた時に対処が遅れてしまいます。

十三路盤ですから私も幾つか取られてしましましたが、これがより

広い十九路盤だつたら先輩の陣地の多くが私に取られてしまつたよ

敗北した俺の原因と改善を小真希は丁寧に教えてくれる。俺はそ

れを聞きながら、囲碁というゲームも難しさに唸つてしまつ。下手

なテレビゲームなんかより難しく、ここまで頭を使うゲームはそう

ないだろう。一手、一手先を読んでいないと簡単にやられてしまつ。

自分は黒なので先手を取れる為に先に攻め込める事ができるが、小

真希は囲を使ってこちらを搅乱しつつ確実に自分の陣地を増やして

いく。目先の事しか見えていない俺では、小真希の数手先を読んだ

行動は理解出来ないし、対処もできない。

常に数手先を読む。このゲームはそれがとても重要になつてくる。ただの卓上ゲームだと思っていたが、それは大きな間違いだつたようだ。

少し冷めてしまつたお茶を飲みつつ、俺は自分のミスを考える。あの時あそこに置いていれば、このゲームはそんな事ばかり考えさせられる。

「大会では基本的に十九路盤が主流なんだろ？」

「そうですね。20級周辺のブロックの場合十三路盤で行われる事もありますが、次のブロックからは十九路盤が確実ですので」

大会とはもちろん囲碁大会の事だ。各県運営の地区大会から全国大会まで様々あるが、とりあえず俺の当面の目標は地区大会に出る事だ。地区大会なら出場は申請すれば可能だが、そこで勝てるかどうかとなると難しい。

囲碁大会では自分が元々持つている級（俺はないので20級から始まる）周辺の級保持者が一つのブロックを形成し、その中で戦う。優勝などは各ブロックごとに行われるそので一つの大会に優勝者が複数いる事になる。まあ、当然だわな。段位クラスのブロック1位と15級くらいのブロック1位の人では実力に大きな隔たりがある。ブロックごとに一つの大会を形成するのは当然だ。

規模にもよるが、だいたい午前から午後を通して5戦くらい。その勝ち数によって順位が決まり、同時に自分の新しい級も決まる。

とにかく、実際に各都道府県の学校団体連盟が認定している級を保持する事は、その後の大会の基準となるし、自分の実力の目安にもなるので当然必要になつてくる。その為にも大会に出る必要があるのだが、俺の実力はまだそこには届いていない。

「まだまだ先は長そうだな」

俺は心からそう思った。

そんな俺に小真希は「焦らず、ゆっくりでもいいので確実に行きましょ」と励ましてくれる。そんな彼女の心遣いに感謝しつつ、俺はお茶を飲み干した。

「あ、お茶のおかわりりますか？」

「じゃあお願ひ

「はい」

「お願ひついでに悪いけど、もう一勝負頼むな」

「よろこんで」

小真希は嬉しそうにうなずき、お茶の用意をする。俺はそんな小真希の楽しげな横顔を見て、この四ヶ月の事は無駄じゃなかつたんだなあと感じた。彼女の笑顔を見ていると、心からそう思える。

お茶を持って戻ってきた小真希と俺は、再び盤を挟んで対局を始めた。

冬は日が落ちるのも早い。俺と小真希は日が落ちる前に下校する事にした。

夕焼けに染まる空を見ながら歩く俺の横を、小真希が並んで歩く。偶然にも帰る方向が一緒なのだ。

小真希は制服の上からセーターを着て、マフラーに手袋という完全防備。一方の俺は特にマフラーも手袋もしないでコートのみの比較的軽装。朝結構暖かかったから気を抜いた為だ。正直、肌が出ている部分が寒い。もうすぐ春だと違うが、寒さはなかなかまだ抜け

ないのだ。

「先輩、寒くないんですか？」

そんな俺を気遣うように小真希が不安げに訊いてくる。それだけ重装備をしても自分だって寒いだろう、本当にいい子だ。見ているだけで心和む。

「まあ、寒いわな。でもまあ、自己責任だし仕方ないさ」「笑いながら言うと、小真希は少し思案顔になる。少しの間があって、小真希は自分のマフラーに触れながら上目遣いになる。

「あの、私のマフラー使いますか？」

俺は小真希の言葉に面食らつたように驚くが、すぐに「いいっていいって。そんな事したら小真希が寒いだろ?」と笑いながら断る。断りつつも彼女の心遣いはありがたい。

そんな俺の言葉に小真希は何か言いたそうだったが「そうですか」とだけ言ってマフラーから手を外す。小真希は人の意見を無視して自分の考えを押し付けるような事はしない子だから、俺が「いい」と言えば納得はできなくとも首を縦に振つてくれる、忠犬気質な子だ。

その言語を最後に、小真希は黙つてしまつ。一いちらも特に話し掛ける話題もなかつたのでしばしの間俺達は無言で歩き続ける。

赤信号で横断歩道の前で止まつた時、小真希は何を思ったのか自分についている手袋の片方を取るとそれを俺に「どうぞ」と差し出して來た。

「いや、俺はいいってば。それにそれじゃお前が寒いだろ」「いや、俺はいいってば。それにそれじゃお前が寒いだろ」

「平気です、こうすれば」

小真希はそう言って手袋を俺に渡すと素手の方の手で俺の片手を握つてきた。さつままで手袋に包まれていた手は温かく、女の子特有的の柔らかさに不覚にも一瞬ドキッとしてしまつた。そんな俺に、小真希は嬉しそうにはにかむ。

「これで寒くないですよ」

「お前なあ……」

そう言いながら、俺はつい笑ってしまった。今更手袋を返す事もできず、俺は「借りるぞ」と言つて小真希の手袋を彼女の手を握つていない方の手に付ける。小柄な小真希用の為少しばかり窮屈だったが、冷たくなった手を温めてくれる手袋は、悪い気はしなかつた。信号が青になり、小真希が一步前へ出る。

「行きますよ、先輩」

俺は手を引つ張る小真希の姿に微笑みながら、横断歩道へと一步踏み出した。

「あの、先輩。バレンタイン、何かご予定はありますか?」

それは数日前の事だった。いつものように部室に顔を出し饅頭を食べ、一局終わつた（当然俺が負けた）後、小真希は突然そう訊いてきた。

俺は湯のみ片手に、水槽の前に立つて熱帯魚にエサを上げている小真希の方を見る。

「バレンタイン? んまあ、特筆して予定らしい予定はないわな」

俺がそう答えると、小真希は「そ、そうですか」とつぶやく。俺は特に気にした様子もなく見事にハンデが意味を成さずに敗北した盤上を見詰め考える。今回はうまくできたつもりだったが、自分でも気づいていなかつた脆い場所を突かれて自陣の防御壁が崩壊したのが痛手だったらしい。十三路盤で見落とすのに、これが十九路盤だつたら発見は更に難しくなるだろう。

「あ、あのお。せ、先輩?」

「んあ?」

「バレンタイン、私どこかに行きませんか?」

俺は思わず湯のみを落としそうになつた。幸い何とか寸前で踏ん張つたので事故にはならなかつたが、驚いた俺は思わず「な、何で?」と誘い言葉に返すべきではない言葉を言つてしまつ。

こちらに振り返つた小真希は俯き加減にタブレット状のエサの入つた真空パックを手でいじつてゐる。心なしか、その頬が赤らんで

いるようにも見える。

「な、何でと言われました。その……」

俺のルール違反な返答に対し答える。「…………と何事

かをつぶやく小真希。

「いや、ごめん。びっくりしちゃって」

「あ、あの。決して変な意味じゃなくて、私友達と一緒にどこかに行くつて経験に憧れてたんです。あ、先輩は友達じゃなくて先輩ですけど。だ、だから、バレンタインを先輩と過ごせたらすぐ樂しいだらうなあつて……」

「いや、別に俺といても樂しくも何ともないぞ」

「た、楽しいですよ」

珍しく声を大きくして言つ小真希に驚きつつ、俺は「まあ、別に予定らしい予定もないし。お前がいいなら別にいいぞ」と了承する。どうせあつたとしても田崎とかと騒ぐか家にいるかしかないのだから。バレンタインなんて、所詮は普通の日だからな。考えているうちに寂しくなってきたぞ、おい。

「ほ、本当ですか?」

なぜか嬉しそうに言つ小真希に俺は「ああ」と答える。正直、小真希はかなりかわいい子だから、そんな子とバレンタインを過ごせることだから断る理由がそもそもない。

小真希は俺に近くに駆け寄つて来ると、「じゃ、じゃあ、約束ですよ」と嬉しそうに小指を立てる。何とも古風といつかわいらしい行動だ。俺は笑いながら同じように小指を立て、小学校低学年の頃以来のゆびきりをする。

ひつして、俺と小真希のバレンタインが決まった。

今思えば、これってデートなのではといつ事を、この時の俺は気づいていなかつた。

そしてバレンタイン当口。

街を支配するバレンタインムードは最高潮に達し、そこかしこでカップル連れがチョコよりも甘いムードを全力全開で放出しまくっている。去年までの俺ならライライラして田崎に止められるのだが、今年は違う。というか、それどころではない。

待ち合わせ場所の噴水公園の噴水の前。俺はまあ待ち合わせの三〇分前にやつて来た。こういう場合男の方が先に来て待っているというのが常識だからだ。だが、そんな俺の計画は根底から粉碎される。

なぜなら、噴水の前にはすでに小真希の姿があつたからだ。

いつもの制服姿とは違う私服姿だ。ワインカラーのカットソーにチェック柄のスカート。トグルボタンの薄桃色のカーディガンに小麦色のマフラー。ハートや星マークが切り抜かれたような金色のオシャレベルトにカーキ色のフリンジブーツ。頭には真っ白な三枚のふわふわ羽の髪留め。しかもトレードマークとも言つべきメガネをしていない所を見ると今日はコンタクトをしているのだろう。その姿はまさに至つて普通の、本気オシャレ服を装備した少女であつた。俺は小真希のその『普通の女の子』な姿について見惚れてしまった。正直、俺の中での小真希のイメージは『絵に書いたような文系のかわいい地味子』という、オシャレとは程遠い存在に思つていた。それが今自分の視界に映る彼女は、そんな地味子を脱ぎ捨てて一人のかわいい女の子として立つていて。うつすらと化粧もしている上にメガネがない彼女の顔は、いつもは隠れてしまつていて彼女本来のきれいさを存分に開花させている。

がつりオシャレをしているのではなく、素材を十一分に引き立てさせる見事なチョイスだ。ぶっちゃけ、そこら辺を歩いている女子より小真希の方が全然かわいい。というか、遠巻きに何人もの男

達が小真希の方を見ている。いつもは絶対注目されない地味子も、聖なる日には輝けるらしい。

「のままもう少し見ていたい気もしたが、早く行かないとあわこわにならナンパされてもおかしくない。そもそもそれ以前にいつもでも女の子を待たせておく訳にはいかない。俺はうつむき加減で立っている小真希の所へと早足で近寄る。

「「めん小真希。待たせなによつに早めに来たつもりだつたんだけど……」

俺が声を掛けると、小真希は顔を上げた。そして俺の姿を視界に捉えるとほつとしたような表情になつた。

「い、いえ。予定の時間よりだいぶ早く到着してしまつたのは私の責任ですから。お構い無く」

「本当だよ。待ち合わせ一時間間違えてたかと思つた」

そう言つと、小真希は「私だつて二〇分も早いからビックリしましたよ」とはにかむ。

「まったくだ。田崎達とだつたら平氣で遅刻するのにな」

「それひどいですよ」

さつきまでの緊張顔がウソのように楽しそうに笑う小真希の姿に俺は内心ほつとする。やっぱりいつもの小真希の方がこぢらとしても安心ができる。

「それじゃ、ちょっと早に行こうか

「は」

俺と小真希は一緒になつて歩き出す。公園から出た所で、小真希はそつと俺の手を握り締めた。ふわふわの手袋から伝わる彼女の温もりは、手袋をしていなかつた俺の手を優しく温めてくれた。

「そういえば、どこに行くんだ？」

俺の問いかけに対し、小真希は「秘密です」とはにかみながら言つてそれ以上は語らない。俺は特に追求する事もなく「そうか」とだけ返して小真希と並びながら歩く。

街にはカップルの姿が多く見られ、傍から見れば俺達もそういう

関係に見えなくもないだろう。しかも今の小真希はそんじょそこらの子より全然かわいい。その証拠に先程から彼女は結構注目され、俺もまた羨望の眼差しを受けている。少しだけ優越感を味わえた。

「あの、先輩。私の格好、変じやないですか？」

そんな時に小真希が不安そうに俺にそう尋ねてきた。俺が「変じやないぞ」と答えると「でも、さつきから周りの人見られているような気がして……」と小さな声でつぶやく。どうやら周りからの慣れない視線を悪い方に捉えてしまつたらしく。

不安そうに小真希は念押しするように「変じやないですよね？」と俺に尋ねてくる。だから俺ももう一度言つてやる。

「変じやないつて。むしと今日のお前めちゃくちゃかわいいぞ」「か、かわ……ツ！？」

言つてから自分が猛烈に恥ずかしい事をぶっちゃけている事に気づき俺は恥ずかしくて視線を逸らした。ちらりと小真希の方を見ると、彼女も顔を真っ赤にして伏せてしまつている。どうやら余計な一言だつたらしい。

心の中で謝りつつ、俺は無言で歩き続ける。隣を歩く小真希も気まずいのか黙つたまま一緒に歩き続ける。ただ、握られた俺達の手だけはずっと繋がられたままだ。

バレンタインに彩られた街へ、俺と小真希は手を繋ぎながら溶けていった。

バレンタインにデートをするカップルは多い。だからか、道を歩いていてもカップルとばかりすれ違う。そんな中俺と小真希は揃つて歩いているので、カップルに見えるかもしれない。まあ、俺と小真希がじや釣り合わないけどな。

「どこもかしこも必死になつてチョコを売つてゐるなあ

バレンタイン当日とだけあって、最後の売りを行う店は数多い。何せ、明日になればチョコは全く売れなくなり、半額とかにしても売れ残つてしまふ。クリスマス後のケーキの半額売りと同じ現象だ。

それを見て、そういうイベントをお菓子会社の陰謀だと思つてしまふ俺は、本当に心が氷のように冷たいのだろう。

「でもさ、売り物のチョコを貰つてもあんまり嬉しくないんだよな。やつぱり手作りじゃないと」

まあ、買ったチョコでも貰えれば嬉しいんだけどな。と俺は一人心中で苦笑してみる。何だかんだ言って、男であるからにはこういうイベントがあつた方が嬉しいのだ。まあ、大概は落胆する事になるのだが、その辺は思考の隅にでも片付けておこう。

「あ、あの。先輩もやつぱり手作りチョコの方がいいんですか？」

俺の独り言に小真希が反応する。

「そりゃ手作りの方が嬉しいさ。その方が気持ちが詰まつているような気がするでしょ？」

「そ、そうですか。そうですかそうですか……」

なぜか安堵したようにそう繰り返す小真希。俺が「どうした？」

と訊くと、小真希は「な、何でもないですよッ」と慌ててはにかむ。俺は少し疑問に残りながらも、特に気にする事もなく歩く。その横を、小真希も続く形だ。

「それにしても、こんなんで良かつたのか？」

俺は先程までいたゲームセンターという選択について少し疑問が残つた。てっきり映画でも観に行くのかと思っていたが、小真希は「ゲームセンターに行つてみたいです」と言って、俺はとりあえずいつも田崎などと一緒に近くのゲームセンターに行つた。今はその帰りだ。

「バレンタインにゲーセンつて、イベントとして変じやなかつたかな？」

「いいんです。私、一度ゲームセンター言つてみたかつたんです

「何だ。行つた事なかつたのか？」

「一人で行くには、ちょっと怖かつたですから」

まあ、女の子が一人で行くような場所ではないわな。事実、ゲームセンターというのは男が多い場所で色々と危なかつたりする。特

に今日はバレンタインという特別な日だけあって、逃げるよつにゲーセンに入っている人も多い。何となく、格ゲーをやつている青年の背中に哀愁があつたりなかつたり。

「それにも、先輩ってゲームお上手なんですね」

そう言つ彼女が手に持つてるのは、先程のゲームセンターのUFOキヤツチヤーで手に入れたウサギのぬいぐるみだ。

「いや、偶然だよ偶然。ほら、穴のすぐ近くにあつたでしょ？ あれなら取れるかなと思つてさ」

事実、俺はゲームセンターに来てもシューティングゲームなどを好んでプレイするので、UFOキヤチヤーなんて見もしない。だが今日はさすがに女子と来ているので、ゾンビを撃ち殺すようなゲームは控えてみたのだが、どうやら正解だつたようだ。

「それでもすごいですよ。私、これ大切にしますね」

そう言つて小真希は明らかに安物であるうそのぬいぐるみを嬉しそうに抱きしめる。わずか200円くらいでこんなにも喜んでもらえるとは、嬉しい誤算だ。

「そう言わると、がんばつた甲斐があるよ」

俺は少し照れながらそう言つと、前を向いて歩く。何となく、今は小真希と顔を合わせるのはちょっと恥ずかしかつた。

小真希も同じなのか、一步引きながら横を黙つて歩いている。ただ、しつかりと俺は彼女の手を握り締め続ける。

「それじゃ、次はどこに行く？」

しばらくしてから、俺は何気なく訊いてみる。何せ、今現在は特に目的もなく歩いているだけだったので、そろそろ目的を定めないといけない。

「そうですね。じゃあ

小真希は嬉しそうに、場所を告げる。

パチッ……

静かな部屋に響くのは、石が盤を叩く音。

白石が打たれた場所は、またしても俺の陣地の弱い場所。すぐこちらも石で防壁を作るが、向こうはお構いなしに次々に一いつ飛ばしや桂馬打ちで臨機応変に対応できる戦線を開拓する。

俺は苦しい状況に唸りながら、それでも石を打つ。

「なあ、一つ訊いてもいいか？」

「何でしようか？」

俺が打つた石のすぐ隣に石を打ち込まれる。打たれた白石のすぐ隣にはすでに打たれている別の白石が。しかし俺の黒石は周りに味方がいない。仕方なく一田飛ばしで線を繋ぐが、またしても先手を奪われてしまう。

俺は為す術がない事と、今の状況に苦笑しながら言つ。

「何でこんな所に来たの？」

俺達が今いるのは駅近くにある碁会所。所謂、囲碁版のゲームセンターという感じか？ お金を払つて色々な人と囲碁を打つ場所だ。周囲にいるのは、主に中年の男性ばかり。若者はと言えば、俺と小真希以外には20代くらいの青年が一人と、俺達と同じくらいの年齢の女子が一人。男子が一人、それくらいか。それでも学生くらいの人が自分達以外にもいる事に少し驚く。

勝負がつき、碁石を片付けながら小真希は恥ずかしそうに打ち明ける。

「一度来てみたいと思つてたんですけど、ここも一人じゃちょっと入りづらくて……」

確かに、ここも先程のゲームセンターとは別の意味で入りづらい。基本的にはおつさんの集まる場所だからだ。学生とおぼしき連中はどうやら別の高校の囲碁部に属している連中らしく、しかも結構常連なのか他の中年の男性などと楽しげに話している。

残念ながら、桜上高校囲碁部はまともに活動しているのは俺と小真希だけだが。

「いつもはネットの中で対人戦をしているんですが、やつぱつこうして実際に会つて戦つてみたくて……」

実際の対戦相手はどうやら俺が父親だけらしい小真希。父親とはいい勝負になるが、たまには別の人とやりたかったらしい。俺ではなく相手にならないしな。

「ならさ、俺と打つてないで他の人と打てばいいだろ?」  
せっかく碁会所に来たと言うのに、小真希は先程からずっと俺と打つている。これではいつも部活と何ら変わりないではないか。すると、小真希は恥ずかしそうに頬を赤らめてもじもじとする。それを見て、すぐに俺はわかつた。要するに、恥ずかしくて声を掛けられないのだ。小真希は人見知りが激しい子だという事は、これまでの経験で十分わかっているしな。

「……要するに、橋渡しになればいいのか?」

「あ、別にそういう訳では……」

「いいくつていいって。それくらいなら任せておけって　　おおい」  
俺は早速年が近い他校の囲碁部四人組に声を掛ける。いきなり中年のおじさん相手では小真希は辛いだろうから、とりあえずは接しやすい同世代からだ。

俺が声を掛けると、向こうもびづやうひがりが気になっていたらしくすぐに反応してくれた。俺達も囲碁部だと話すと、向こうもわかつてはいるが囲碁部だと明かす。後は同世代で同じ趣味を持つ者同士だ。

俺はとりあえず傍観に徹する事にした。残念ながら向こうの囲碁部には俺くらいの実力の子はいなかつたのだ。

とりあえず、向こうの女子の一人と小真希が戦う事になった。緊張しているのか、小真希は隣に立つ俺の服の裾を片手でずつと掴んだままだ。向こうの連中が微笑ましげに俺達を見ているのに気づき、俺は何とも言えない複雑な笑みで返すしかない。

これで小真希に友達が増えればいいのだが……と思つたいたのだが、案外それはすんなりだつた。

小真希の強さはやはりここでもずば抜けていた。最初に相手にした女子（10級所持者）を簡単に粉碎すると、女子（8級所持）、

男子（12級所持）、男子（5級所持）もことじとく撃破。彼女の快進撃に他のテーブルのおっさんなども注目し、次々に対戦を挑まれる始末。

結局、ほぼ全員と相手にした小真希はほとんどの戦いで勝つ事ができた。ただやはり上には上がいるもので、自営業をしているという中年男性と店のオーナーには僅差で負けてしまった。俺としては本気の小真希が負けている姿は初めてだったので、実に珍しい体験になつた。

結局、ファストフード店のハンバーガーで昼食を済ませてから俺達はさつと墓会所に缶詰になつた。

帰る頃には、すっかり日が暮れていた。

「楽しかったか？」

「す、すごく楽しかったですッ！」

そう言って小真希は嬉しそうに答える。

他校の囲碁部の連中とはまた後日会おうとこいつ約束まで取り付けてしまつたし、終わる頃にはおっさん達とも小真希は楽しげに話せるようになつていて。俺としても丁寧に戦い方を教わつたりできたので、いい経験になつた。

「でも、バレンタインの日に行く所ではないよな」

俺が苦笑しながら言つと、小真希もそれは自覚していたのか恥ずかしそうに頬を赤らめて「す、すみません……」と身を小さくして謝る。

「別に責めてる訳じゃないよ。ただ、面白い経験ができたなあつてだけさ」

さつき田崎からメールが来た。今、奴らは今から駅のカラオケに向かう所らしい。向こうに参加していたら経験できなかつた事は事実だ。

駅周辺はまだライトアップされていたらしく賑やかだつたし、カツプルもある意味これから本番と言いたげに激甘ムードを漂わせていたし、商店はついて三割引や半額でチョコを殴り売りを始める。それらを見て、バレンタインが終わるのだなあと感じた。

特にバレンタインらしい事はしていないが、いい一日だつたとは断言できる。

「今日は、すごく楽しかつたです」

隣を歩いていた小真希は唐突にそう言つた。俺が振り返ると、小真希は笑顔だつた。それを見て俺も自然と微笑む。

「なら付き合つた甲斐があつたよ」

「先輩には本当に感謝しています。私が今まで行きたくても行けな

かつた所に、楽しく連れてつてくれて

「お前にはいつも世話になつてゐるからな。これくらい何でもないさ。いつでもまた付き合つてやるからせ、また言えよな」

俺の言葉に小真希は恥ずかしそうにほにかみながら、小さくうなづく。俺はその笑顔に満足しながら歩き続ける。気がつくと、一日の始まりとなつた噴水公園に着いていた。公園の中にはカップルの姿がいくつもあり、チョコを渡している最中の者や、抱き合つている者、終いには現在進行形でキス中のカップルもいる とりあえず、さりげなく俺は小真希を連れてそういうものが見えない場所に移動する。気づいたら小恥ずかしいし、何となく小真希には見せたくなかった。

「それじゃ、そろそろ帰るか？ 時間も時間だし、家まで送つて行くよ」

足を止め、振り返つて小真希に向かい合いながら言つ。すると、小真希は少し残念そうな表情を浮かべて「そうですね」とつぶやく。

「一人で帰れます。それじゃ、ここで失礼しますね

「おう。また月曜日、部室でな」

俺は簡単に別れのあいさつを済まし、今からでも田崎達の所にでも行つてみるかなどと考えながら歩き出す。

「あ、あのッ」

背後から小真希に呼び止められる。何事かと思つて振り返つた瞬間、目の前に何かが突き出された。一瞬、目の前のそれが何だかわからなかつたが、それはラッピングされた小さな箱であつた。それを突き出すように握つてゐるのは、小真希であつた。

小真希は顔を真つ赤にしてフルフルと震えながら俺にその箱を差し出し続ける。それがバレンタインチョコだと気づくのにには、そう時間は掛からなかつた。

「あ、ありがとう」

俺は驚きながら、そのチョコを受け取る が、小真希はなぜか

チョコを離そうとはしなかった。俺相手に緊張のあまり硬直しているのか。とりあえず、俺は困る。

「えっと、もらつていいんだよね？ なら、手を放してほしいんだけど」

「……わ、私も一緒に」

「はい？」

つぶやくように言つた小真希はゆっくりと顔を上げる。それはもう病院に行つた方がいいんじゃないかというくらいに顔を真つ赤にさせた小真希は、ガチガチに緊張している。それでも、勇気を振り絞るようにして、震える口を開く。

「ちよ、チョコと一緒に、私も貢つてください」

古風な子だとは思つていたが、決め言葉まで古臭い。それつて一体何年、下手したら十何年前の決め言葉ではないか？

何というか、一瞬それが告白である事すら忘れてしまつくらい俺は呆れていた。でもまあ、何というかすごく小真希らしいのも事実だ。

「えっと、それは付き合つとかつていう話かな？」

俺もそれが告白だと理解するにつれて恥ずかしくなり、おそらく俺も顔が赤くなっているだろう。寒い夜なのに、体は暑いくらいだ。俺の問いかけに小真希は小さくうなずき、顔を真つ赤にさせたままきこちない、でもかわいらしげい笑みを浮かべる。

「先輩の事、ずっと好きでした。初めて会つた時からずっと……こんな私で良ければ 付き合つてください」

顔を真つ赤にさせ、ブルブルと体は震え、今にも泣き出してしまいそうな状態の小真希。俺はそんな彼女を見詰めながら、何となく彼女との思い出を振り返つてみる。

初めて会つた時からかわいい子だとは思つていた。気配り上手で謙虚で、それでいてすごく優しいとてもいい子だ。彼女にするなら非の打ち所がないくらい。

そんな子が自分を好きになつてくれた事が今でも少し信じられない

いが、目の前で緊張しまくっている小真希は現実だ。

俺は小真希が好きだ。友達とか後輩としてそう接していたが、今思い返してみればきっとずつと好きだったのだろう。じゃなきや、文化祭の日の俺の決断の納得がいかない。今、ようやくあの時の自分を突き動かしていたものがわかつた。

自分の気持ちはわかつた。そして彼女の気持ちは断る理由など、ある訳がない。

「こんな俺で良ければ、よろしく頼むよ」

俺もまた恥ずかしそうに言うと、小真希の顔が見る見るうちに笑顔になっていく。先程までの緊張だらけとは違う、心から喜んでいる笑顔だ。

「あ、ありがとござりますッ」

「こちらこそ、ありがとつな」

俺が恥ずかしそうに手を差し出すと、小真希も恥ずかしそうにその手を握り締めた。さつきまでと違つて、俺まで緊張してしまつ。かわいい後輩からかわいい彼女に変わると、こんなにも一つ一つの動作に緊張してしまうのか。

これで俺達は恋人同士になつた訳だが、逆に恥ずかしくてお互いに顔を見られなくなつてしまつ。

このままお別れ……という訳にはいかないだろ。だがぶっちゃけ人生で初めてできた彼女を相手に軽くパニックしている俺は対策が一切浮かばない。

妙な沈黙が、俺達の間に降りてくる。

「あ、あの……迷惑でしたか？」

俺が気まずそうに黙つているのを見て、小真希は心配そうに声を掛けてくる。

「め、迷惑なんて思つていないぞ。う、嬉しいくらいだ、うん」

「そ、そうですか……」

そして、またお互に黙つてしまつ。

何か手はないか……必死になつて思考を巡らせていくと、ポケッ

トの中の携帯がブルブルと震え出した。チャンスとばかりに俺は小真希の手を解いて携帯を取り出すと、メールだ。差出人は田崎だ。メールを開くと、今カラオケで騒いでいるんだがお前も今から来るか？ という内容だ 俺はこれに飛びついた。

「か、カラオケ行くかッ！」

気がついたらそう叫んでいた。俺が大声を出したものだから小真希は一瞬ビックッと驚いた後、「か、カラオケ……ですか？」と問い合わせてくる。

「そうカラオケッ。今俺のクラスの連中が騒いでるらしくてさ、今から来るかって誘われたんだけど、お前も来るか？」

たかがそれだけ言うのに緊張しながら言う俺。何というか、ちょっと自分が情けなくなってきたぞおい。

俺の問いかけに対し、小真希は少しの間考えるようになつた後、「わ、私なんかが一緒にして大丈夫ですか？」と不安げに訊いてきた。

「当たり前だろ？ 何たつてお前は俺のか、彼女なんだからさ」言つてみて、俺はその二文字が猛烈に恥ずかしい事に気づく。小真希も彼女と言われ、顔を真つ赤にして黙つてしまつ。

またしても妙な沈黙が流れるが、小真希はゆつくりと伏せていた顔を上げる。

「じゃ、じゃあ、お願ひします」

「お、おう」

俺は緊張しながら、もう一度手を差し出す。小真希もまた緊張しながらその手を握り締める。温かくて、柔らかくて、小さな彼女の手。

俺は緊張しながらも、小真希が彼女になつた事が嬉しかつた。それはきっと、小真希も同じだ。そう信じたい。

俺と小真希は手を繋ぎながら、また駅の方へ向かつて歩き出す。

公園に入つて来る前は先輩と後輩だったが、今こうして出て行く時は彼氏と彼女の関係になる。

「あ、雪……」

彼女の声に気づいて空を見上げると、チラチラと雪が降つてきていた。都会とまではいかないが、田舎でもないここは雪はあまり降らない地域だ。だからこそ、こつして降るととても美しく見える。いつも見ている街並みが、変わる。

「寒くないか?」

いつの間にか、俺の緊張はかなり落ち着いていた。小真希はまだ緊張している様子だつたが、最初に比べればこちらもずいぶんと落ち着いている。

「大丈夫です」

「そつか……」

俺は小真希の手を繋ぎながら、歩き続ける。時間を確認すると、まだ8時くらいだ。小真希の帰宅時間はどれくらいだろうか？ 親御さんが心配するのではないか。電話の一本でも入れりせよつか。などと色々な事を考えていると、

「……あの」

その声に足を止めて振り返ると、小真希は照れたように微笑みながら、スッと手を放して俺の手の前に小指を立てた。

「……一緒に、囲碁大会に出ましょうね 秋斗先輩」

俺はうなずきながら、その指をしっかりと結んだ。

俺と小真希の、小さな約束だ

手に持ったチョコのリボンの上に、やつと雪の結晶が彩られていた……

## チョコと聖夜の誓い（後書き）

という訳で、今回も前回の俺と妹と偽装デート大作戦と同じ一人称で描いてみました。

やっぱり一人称だと苦労しますね。一人の視点のみで描かないといけないので。

今回のテーマの一つは囮暮なので、作品の重要な場面で囮暮が登場します。その他簡単なルール説明などもチラホラと。なぜ囮暮のルールを僕が知っているかと言うと、実は高校は文芸部でしたが中学の頃は囮暮部に属していたのです。地区大会3位入賞した事もありますし、世界で通用するくらいのレベルである5級という階級を認定してもらっています。

……まあ、囮暮はもう何年も打っていないのでもうそんな実力はありませんが。とりあえず簡単なルールくらいならまだ覚えているので。

そしてもう一つのテーマは純愛です。実は僕の作品で主人公とヒロインがハッピーエンドを迎えて結ばれた作品は今までありませんでした。

僕の代表作である艦魂年代史では本編外伝共に主人公とヒロインは結ばれるも死に別れますし、もう一つの代表作である恋姫狩人物語は現在もそういう関係には発展していません。前回の俺と妹は実の兄妹なのでそういうルートはありませんし。

なので、今回の作品は黒鉄大和が描いた中では初めてちゃんとハッピーエンドを迎えたカツプルの作品になります。最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

前回も言いながら結局達成できませんでしたが、またこういうイベントなどがありましたらこんな感じで短編を描いてみようかな、なんて。

その時はまたよろしくお願ひします。

それまでは、既存のシリーズの執筆に専念していましたので。  
改めまして、最後まで読んでくださいありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9315q/>

---

俺と棋士姫とバレンタイン

2011年2月14日23時22分発行